

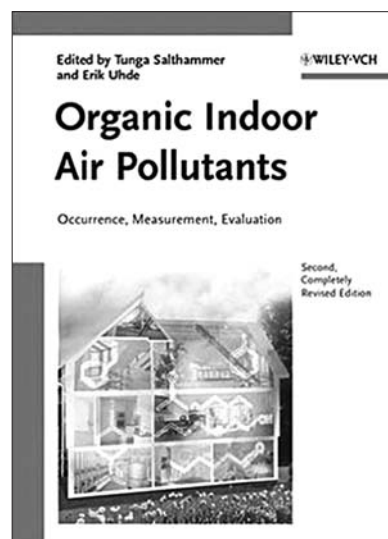
「Organic Indoor Air Pollutants: Occurrence, Measurement, Evaluation」

Tunga Salthammer, Erik Uhde (編集)

単行本, 464ページ, \$248
(Wiley-VCH, 2009/10/26)

私が仕事で空気質に携わるようになり、知っておいた方が良くであろう知識を入手するために、その当時御世話になっていた大学の先生より推薦して頂いた書籍です。この本では、空気質としての指針値の考え方や、材料や室内の放散源の評価法や、実際の測定事例などが掲載されています。空気質に携わっている研究者に必要と思われる情報が一通り掲載されているので、最初のページから読み進めていき、基礎的な知識習得に役立てても良いと思います。特に、室内環境学会の学術大会に参加される前に一読されると、議論されている話題の理解にも役立つのではないのでしょうか。また、実際の研究の場面で困ったときには、関連する章を読むことにより、なんらかのヒントが得られるかも知れません。

空気質では発生源の特定が話題として度々出てきますが、この発生源の特定や、空間における濃度予測のために、チャンバーがよく利用されます。このチャンバーを用いて、材料から放散している成分の評価法をチャンバー法と呼んでいます。この手法についても詳細に記載がされています。これら手法を執筆されている先生方は、主に空気質評価に携わり、評価手法を研究されてきた先生方なので、試験条件などの設定根拠も記載されており、研究目的に応じて、評価方法が応用できるように配慮されています。単純な情報を開示だけの書籍ではなく、これまでの先人の研究を礎に、今後の空気質研究を発展させるためにまとめられているように感じます。実際の室内や家電製品などの測定事例も記載されており、具体的な評価イメージなども掴みやすくなっています。これから空気質分野の研究に取り組まれている研究者には、是非一度お読み頂きたい書籍の一つです。



(株)いすゞ中央研究所 車両研究第一部 達 晃一)